青山国際政経論集 103 号，2019 年 11 月

金鍾泌氏の名誉博士号授与記念講演を公表するにあたり

土　山　實　男

ここに掲載するのは 2007 年 11 月 13 日に青山学院大学が金鍾泌（キム・ジョンピル）大韓民国元国務総理に名誉博士号（国際政治学）を授与した際，名誉博士号授与式典の後に金鍾泌氏が「日韓関係と東アジアの将来」と題して日本語で行われた記念講演です。

金鍾泌氏からこの講演を公表することに承諾をいただいていたにも拘らず，これまで公表されないままになっておりましたので，昨年 6 月に金鍾泌氏が 92 歳で亡くなられた後，あらためてご遺族にこの講演を公表することに承諾をいただき，ここに本誌で公表される運びとなりました。

この講演の中で金鍾泌氏は，戦後，平和で民主的な社会を築いてきた日本を韓国は評価すべきだと言われる一方，歴史の問題についてはお互いに自制する知恵が必要であり，また相手の立場を理解し配慮する寛大な精神を持たなければならないと言われています。また，北朝鮮の核問題をふくむ国際情勢の分析はとても 12 年前のものとは思えない鋭さを持っています。日韓関係はいま国交正常化以来最悪だと憂慮されています。特に，この数ヶ月の韓国政治の変動ぶりはこれまでに築かれてきた日韓・日米韓関係の大前提を覆しかねない勢いです。しかし，残念ながら金鍾泌氏のような政治家はもう韓国にはおられないのかもしれません。韓国は日本にとってもっとも近い隣国です。焦らず，傲らず，両国間に信頼が回復するよう努力することが望まれます。

国際政治経済学部の創設 25 周年を記念して，青山学院大学が金鍾泌氏に名誉

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2019

博士号を授与した理由は，青山学院と同じメソジスト派の貞洞（チョンドン）教会でキリスト教に入信されたクリスチャンだった金鍾泌氏が，日韓関係の構築と発展に立派な足跡を残されただけでなく，金泳三（キム・ヨンサム）政権や金大中（キム・デジュン）政権の誕生に奔走されるなど韓国政治の民主化に大きく貢献されたからでした。一私立大学の行事だったにも拘らず，金鍾泌氏の名誉博士号授与式典には中曽根康弘，森喜朗両元首相を始めとして，扇千景参議院元議長，後に韓国外交通商相（外相）を務めた柳明垣駐日韓国大使，小倉和夫元駐韓大使，そして戦後の日韓関係に携わった政治家，外交官，そして報道関係者ら日韓両国から多くの要人が出席されました。

周知のように，日韓関係正常化の取り決めである日韓基本条約（1965 年）締結に先立って，1962 年 11 月に中央情報部長だった金鍾泌氏が大平正芳外務大臣との会談を行い，後にいう「大平・金メモ」――日本が韓国に 5 億ドルの経済支援を行うという日韓合意――がつくられて，「漢江の奇跡」と呼ばれる韓国の経済発展を可能にする条件の一つが整ったのです。また，1971 年から 5 年間国務総理を務められていた間に起こった金大中拉致事件によって日韓関係が危機的状況に陥った時も，田中角栄首相と直接会談を行って日韓関係を修復されたのが金鍾泌氏でした。1997 年の大統領選挙では，旧政敵でもあった金大中氏を勝利に導き，その金大中大統領のもとで金鍾泌氏は再び国務総理に就任されて金大中政権を支えられました。1961 年に始まった朴正熙新体制のもとで，朴大統領の後継者と目されながら，結局，大統領にはなられませんでしたが，2004 年に政界を引退されるまでの約半世紀の金鍾泌氏の歴史はそのまま韓国政治の歴史だったと言っても言い過ぎではありません。

青山学院大学は今年 6 月に亡くなられた金大中元大統領夫人李姫鎬（イ・ヒホ）氏にも名誉博士号を授与しており，毎年夏になりますと間島記念館前のロータリーに李姫鎬氏が植えられた朝鮮むくげと金鍾泌氏が植えられた百日紅（さるすべり）が花を咲かせます。百日紅が初めて白い花をつけた年，その写真を金鍾泌氏に送りましたところ，百日紅が青山学院にしっかりと根を下ろし大きく育つことを祈っているという書状が届きました。金鍾泌氏が体調を崩された後，2012 年 3 月，1960 年代後半から 70 年代半ばにかけての日米韓の外交・安全保障問題について金鍾泌

氏のお考えをお伺いするためにソウルのご自宅にお訪ねすると，車椅子に乗っておられましたが依然として頭脳は明晰で，事前に送ってあった質問に時間をかけて答えて下さいました。帰り際に手を握られてなかなか離されなかったのを思い出します。

名誉博士号授与式典に来校された時，金鍾泌氏に青山学院と創設 25 周年を迎える国際政治経済学部のためにそれぞれ書をお願いしましたところ，式典当日，法人ビル 3 階の会議室で持参された筆で一気に書かれた書の一つが，現在，8 号館 4 階の会議室に掛けられている「勿謂今日不学而来明日」と書かれている書額です。これから国際政治経済学部で教えたり学んだりする皆さんが，この書を見て金鍾泌氏が韓国の政治と外交において何をして来られたかを考える機会になってくれればと願っています。

なお，この講演を公表するにあたり，若干の字句の修正を行ったことを申し添えます。

青山国際政経論集 103 号，2019 年 11 月

日韓関係と東アジアの将来

青山学院大学名誉博士号（国際政治学）授与記念講演

（2007 年 11 月 13 日）

大韓民国元国務総理　金　鍾泌

敬愛する深町正信青山学院院長，松澤建青山学院理事長，土山實男国際政治経済学部長を始めとする青山学院大学の教職員の皆様，そして日本の未来を開いていく青山学院大学の学生諸君，本日，青山学院大学がまことに至らぬ私に誉ある学位を授与して下さいましたことに心から感謝申し上げますと共に，また大変光栄に思う次第でございます。

特に，お忙しい中，ご出席下さいました中曽根康弘元総理，森嘉朗元総理，そして扇千景元参議院議長を始め日本各界の指導者の皆さまに深く感謝申し上げます。

私は，今日，日韓関係の発展に寄与したささやかな功績により名誉博士号をいただき，身に余る光栄でありますが，青山学院大学の学位であるということに特に大きな誇りを感じております。と申しますのは，青山学院は 130 年余りの伝統を持つ由緒ある大学であり，日本の近代化のために先駆的な使命感を持ってキリスト信仰に基づいた建学の理念のもとに，世界に貢献する数多くの逸材を輩出してこられたからであります。

創立 25 周年を迎えた青山学院大学国際政治経済学部も多くの国際的な人材を教育・養成し，グローバル化する世界の経営の牽引車になっているとお聞きしております。

この素晴らしい青山学院大学の同門として私を招待して下さいました青山学

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2019

院のすべての関係者の方々に，ここでもう一度心からお礼申し上げたいと思います。

本日，私は青山学院大学名誉博士号（国際政治学）の学位を受けましたこの席上で，「日韓関係と東アジアの将来」に関しての所見を述べるべく拙論を準備いたして参りました。

私が韓国人として日本を知り，日本と接してきたその道のりは非常に長いものでしたが，この間，両国の環境は随分変わりました。日韓国交正常化が成立した1965年当時は一年を通して両国間を1万人程度が往来するだけでした。ところが，今では一日に1万人以上の人たちが両国を行き来する時代になっています。貿易と投資においても最も密接な関係を結んでいる国が韓国と日本です。韓国の子供たちは日本の漫画やゲームに熱中し，日本のご婦人方はヨン様を想いながら暮らしている時代になりました。

それにも拘らず，日韓関係を象徴する修飾語は余り変わっていません。こんにち，多くの韓国人，多くの日本人は未だにお互いを「近くて遠い関係」だと認識しております。

どうしてでしょうか。

それはまさしく過去の歴史の記憶にとらわれて，未だに私たちの現在と未来を皮相的にしか理解していないからだと思います。悪い記憶は清算して，良い関係に発展させることが健康的な思考であるはずです。しかし，悪い記憶を繰り返してばかりいては，明るい未来を開いていくことができません。

1961年の韓国の軍事革命の直後，私は日本と韓国の国交正常化に真剣に取り組みました。たとえ両国の間に不幸な過去のしこりが残っていたとしても，日韓関係は今こそ新しく建て直し明日を切り開いて行かなければならないという信念で，私は対日交渉に臨んだのでした。

私は1971年から5年，1998年から2年6ヶ月，2度にわたる国務総理在任期間を含めて，43年間，国会議員として韓国と日本の政治家やリーダーの方々

と交流を続け，日韓の相互理解と信頼を深める先頭に立ってきました。

こういった立場から最近の日韓関係を眺めてみますと，両国の国民が頻繁に交流して和解と協力を指向しているのに対して，両国の政治家たちは未だにこの流れについてゆけず，むしろ過去の歴史から離れられないでいるような印象を拭いきれません。

過去の歴史に纏わる諸問題については，お互いに自制する智恵が必要です。同時に，相手の立場を理解し配慮する寛容な精神を持たなければならなりません。日韓両国の指導者たちが先頭に立ってこのような努力をする時，両国の国民もお互いを尊重する方法を学び，身につけるようになるものと信じております。

私は日本が過去にあったわだかまりを率直に認め，これを若い世代に淳々と教えていかなければならないと思います。そして韓国は，戦後，平和で民主的に成長してきた日本を，よく理解して評価すべきであると強調したいのであります。お互いに対する信頼と尊敬が，韓国と日本を「近くて近い隣国」にする近道だと私は信じています。そのために日韓両国の政治家たちは，より高い次元のリーダーシップを発揮しなければならないでしょう。私たちは 21 世紀の「新しい日韓関係」を築くことは勿論のこと，20 世紀の試行錯誤を克服して，東アジアと世界の未来を開拓する真に「同伴者的関係」を築いていかなければなりません。

過去の歴史と民族主義にとらわれて葛藤を繰り返したり，瑣末なことに執着してはならないと思うのであります。より長期的で大局的見地に立って韓国と日本が共有する民主主義，人道主義，そして市場経済の価値を基にした東アジアと世界の平和と繁栄に共に寄与しなければならないことは論を俟(ま)ちません。

いま，韓国と日本が共に解決していかなければならない重大な課題の一つは北朝鮮問題であります。北朝鮮の核問題は東アジアが直面している最も急を要する安全保障課題であります。

北朝鮮の金正日政権が核を保有している限り，日本は北朝鮮を受け入れられないでしょう。また，朝鮮半島の非核化が達成されない限り，韓国にとっては南北統一に至るまでのあいだ北朝鮮との平和共存ということもあり得ないでしょう。

ところが，今まで膠着状態に陥っていた北朝鮮の核問題が，最近ようやく幾ばくか進展しているように思われます。去る 9 月，ジュネーブでの米国と北朝鮮間の対話以後，北朝鮮は今年中に寧辺の核施設を無能化すると約束しました。北朝鮮はこれまで，今年 2 月の 6 ヶ国協議の合意事項の履行を拒んでいましたが，今回これを実践することを再確認したことは評価できる変化だと思います。9 月 7 日，米国のブッシュ大統領はシドニーで開催された APEC 会議で韓国の盧武鉉大統領と会談し，もし北朝鮮が核を完全に廃棄すれば終戦宣言と共に北朝鮮と平和条約を締結する意向があることを明らかにしました。

日本が日本人拉致問題と核問題の解決が日朝関係正常化のための基本条件であると主張されていることは当然であります。

北朝鮮の核とミサイル，拉致問題を包括的に解決したうえで，日朝間の国交を正常化しようという「平壌宣言」の約束が生かされるように，日本と北朝鮮の積極的な努力を期待してやみません。

10 月の初め，北京 6 ヶ国協議で北朝鮮の核無能化措置と核プログラムの申告問題について合意が得られましたが，合意された内容はまだはっきりしておりません。

10 月 4 日，7 年ぶりに開かれた南北首脳会談は，「南北関係発展と平和と繁栄のための宣言」を通して朝鮮半島の平和を確約し，各種の経済プロジェクトを発表しました。これを受けて国連も支持するという決議が採択されました。

しかしながら，北朝鮮の核問題の解決なしには平和も経済も，またそれらに必要な協力も成り立ち得ないでしょう。

北朝鮮は，そう簡単には核を放棄しないでしょう。なぜならば，北朝鮮の核問題は単純に核それ自体の問題に留まらず，北朝鮮政権の命運を左右する北朝

鮮体制の存立と関連した問題であるからです。

北朝鮮の核無能化措置は，間違いなく 6 ヶ国協議において北朝鮮核問題を解決するための成果になるでしょう。しかし，北朝鮮の核能力を完全に除去する為の道は未だに険しいと考えます。と言いますのは，北朝鮮がすでに製造したとされる核は勿論の事，今後，核兵器を製造することができるプルトニウムと濃縮ウラニウムのプログラムまで除去しなければならないからです。したがって，そのための北朝鮮との新しい協議が残っており，その過程で私たちは紆余曲折の長い道のりを歩まなくてはならないかもしれません。

問題解決の鍵は北朝鮮の指導部の認識にあります。彼らは核を放棄することは国際社会に北朝鮮体制を無防備に開放する危険な道だと思っているに違いありません。ともすれば，北朝鮮の社会主義体制が崩壊するかもしれないと不安に思っているのです。

朝鮮半島の統一への歩みも東アジアの平和も北朝鮮が非核化と開放改革の道を進んでこそ望み得ることであります。そのような決断と選択が，結局，北朝鮮自身の為であるということを金正日政権が悟るための持続的な外交活動が必要なのです。これが日韓両国がこれから一緒に協力し，努力しなければならない 6 ヶ国協議の方向でもあるのです。北朝鮮が核を放棄し開放を通じて国際社会に合流するように，北朝鮮に変化を促すよう導くために北朝鮮に圧力をかける分別と原則に基づく対北朝鮮政策が韓国と日本に求められています。韓国と日本は北朝鮮という難儀で特殊な相手を正常に戻し，南北統一が実現するまで平和共存を維持することが，東アジアに恒久的な平和を定着させることに繋がるでしょう。

21 世紀は帝国主義や膨張主義がまかり通ることのない開放と協力の時代であります。

私たち日韓両国は旧態依然とした不信と反目の束縛にこれ以上とらわれていてはなりません。東アジアの繁栄と将来のためにも，絶対望ましいことではありません。韓国と日本は東アジアでの地域秩序と未来の協力を先導するパート

ナーとして新しい次元にはっきり立たなくてはなりません。民主主義と市場経済，法の支配と人権尊重など，韓国と日本が共有する同質性は両国間の成熟した協力を可能にすることでしょう。両国は共に戦争の焦土から立ち上がり，民主主義と市場経済を自らの手で達成した智恵と能力を持っております。今こそ両国は，各々が達成した貴い経験と成果を，東アジアは勿論の事，世界と分け合いながら新しい国際秩序を作っていく先頭走者にならなければなりません。

私は，最近，東京大学の教授が日本人の意識に関する調査をした結果に注目しています。その調査結果というのは「私はアジア人だ」と考えている日本人が 18.5% に過ぎないという衝撃的な事実であります。非常に憂慮されることだと言わざるを得ません。日本はアジアにおいて指導的な立場にあります。また，好むと好まざるとに拘らず，そのような位置に立つべき国家であります。足はアジアの地に着けていながら，精神を他のところに置いていては，真のアジアの指導的な国にはなれないでしょう。日本人の 18.5% が「アジア人」と考えているのでは，アジアの望ましい平和と繁栄，そして協力の環境を作り上げることは，多分，不可能だと思うのです。私はアジア国家である日本に敢えて勧告いたします。日本はアジアと運命を共にするという認識と自覚ある責任感を持たなければなりません。アジアのリーダーとして前向きな思考と行動を取ってほしいと思います。

幸いにも，新しく発足した福田康夫内閣が「アジア重視外交」を指向するという展望を持っていることに安堵いたしますと共に，そのような未来志向的な政策転換が日韓関係と域内の信頼増進に寄与することを期待しております。

冷戦が幕を閉じた後，東アジアでは海洋勢力と大陸勢力が対抗して，勢力均衡をつくろうとする兆候が現れています。しかし，私は国際政治も今は新しいパラダイムを築かなければならない時だと考えております。力で制圧しようとする競争よりは，お互いに共に勝つウィンウィンの善意の競争が必要なのではないでしょうか。

韓国と日本は米国が今まで東アジアで遂行してきた地域を安定させる秩序維

持国の役割を尊重し，これからもより緊密な同盟関係を発展させていかなければなりません。しかし，だからといって，これが中国やロシアを牽制して包囲する対立外交に変質してはいけないでしょう。中国の経済規模が急速に大きくなり，国際社会での影響力が次第に膨張しているのが現実であります。このような中国を疑心暗鬼して警戒するよりは，中国が国際社会で責任ある一員として定着するように協力する外交が望ましいのです。東アジアが共有できる平和と繁栄の秩序構築のために，日本，韓国，そして中国の首脳たちが頻繁に会って真摯な智恵を絞らなくてはなりません。

いま，国際社会は新たに浮上した各種の脅威に悩まされています。核を始めとする大量殺戮兵器の拡散，テロリズム，国際犯罪，地球環境破壊，エネルギー問題，民族と宗教紛争など，葛藤する多様な要因が複合的に重層的に問題を起こしているのがこんにちの現実であります。イデオロギーと理念をめぐる論争が退いた後，民族・集団間の排他的な利害衝突と不信が世界平和を脅かしています。

勿論，このような問題を根本から解決しようとすればより多くの努力と時間が一層必要になるでしょう。そのような問題の解決の過程で，韓国と日本は忍耐と和解の姿勢を堅持しながら模範を示し，難しい問題に積極的な行動をとりつつ問題を解決に導く先進的な外交を展開しなければなりません。

人権が侵害されている所では人道主義を強調し，富の二極化が深刻な所では，疎外された人々に対する配慮と支援を惜しまないようにしなければならないでしょう。

会場にご参集の皆さま，さあ，共に明るい未来を夢見ながら生きていきましょう。過去の歴史にしがみついているよりは，韓国と日本が両国のことだけに閉じこもっているのではなく，東アジアと世界の明るい未来を共に開いていく日本と韓国になりましょう。（拍手）私もこれから先も日韓両国の未来のために意味ある余生を送ることを皆さまにお誓いすることを本日の記念講演の結びの言

葉といたしたく存じます。（拍手）

本日，身に余る光栄であります名誉博士号（国際政治学）の学位を授与して下さいました青山学院大学の無窮なる発展をお祈りいたしますと共に，ご出席して下さった皆さまの益々のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）